

備陽史探訪

第77号

発行
備陽史探訪の会
福山市多治米町5-19-8
TEL. (0849) 53-6157

【路傍の文化財】

地神塔のいろいろ

出内 博都

れている。多くは集落単位で講が組織され、元禄期頃から始まったとされ、西日本では瀬戸内地方に濃密な分布がみられる。」

地神（ジン）さんという呼び名で親しまれている地神塔にも色々な形、神名があつて、その土地・時代の民俗と関連して考えさせられるものがある。民俗学辞典には、大要次のように記されている。「春分・秋分」に近いツチノエ（戊）の「社日」といい、この日に地神を祀る講を「地神講」とか「社日講」と呼ぶ。社日には土を動かしてはいけないという禁忌があり、この日は畠仕事をしないで、講中が当屋に集まって、神事やお供えをして地神を祭る。全国的にはごく稀に「刻像塔」もあるが、大部分は自然石や角柱に「地神」と刻字した文字塔が多い。刻字のない文字通り自然石のものもある。地神は稲の穂を持って来た神とか、春の社日に来て田畠に出て、秋に帰るまで作物を作っている作神と考えら

れている。多くは集落単位で講が組織され、元禄期頃から始まったとされ、西日本では瀬戸内地方に濃密な分布がみられる。」

くる魔物を排除するという役目と同時に、農耕神としての性格をも持っている」と解されたものと思える。道祖神の前に立てられる御幣に「大土祖神」と書かれているのも、作物を育てる「つち」の神という素朴な農耕神信仰がうかがえる。ジン様が農耕神そのものである形は、福山市加茂町中野の県道沿いに、高さ二メートル近い大きな自然石に「五穀神」と彫ったジン様がある。これなどは単に土地の神というより農耕神としての信仰が強く現れた形である。

地神塔は大別すると形態的には二つの系統になる。一つはかなり大きく形のよい自然石を立てたものと、他に五角柱の石塔に神名を刻んだものがある。地域差もあるだろうが、一般的には自然石の方が多くいようである。自然石に「地神」と楷書で深々と彫られたものが多い。神名はこの他にごく僅かであるが「大土御祖神」とか「堅牢地神」「地皇」なども例外的にはある。「堅牢地神」という神名は「阿含経」や「金剛経」などの仏典にあり、この神は大地を司る神として説かれている。また、地神（ジン）は文字通り土地の神、道の神と解釈され農耕神という信仰から転じて道祖神を「ジン様」として拝み、社日に地神講をしている処もある。道祖神をジン様が習合した形で、両者に共通した性格つまり道の辻などあつて、よそから入って

自然石を基調とした地神塔のほかに五角柱の石塔の各面に神名を彫ったものがある。五角形の一边が十センチから十数センチ、石柱の高さが数十センチの整った形の石塔である。五角柱の各面に彫られた神名の文字は異なるが、①天照大御神②大己貴命（オオナムチノミコト）③少名彦命（スクナヒコノミコト）④倉稲魂命（ウカノミタマノミコト）⑤殖安媛命（ハニヤスヒメノミコト）の五神である。この五神は古事記と日本書紀とは、その出自、神名、神徳なども異なるので各石塔によって表現は多少違っている。①の神は日本の神々の象徴で、国作りの基本である農耕の神として、信仰の中心にな

歴史博物館講堂は、三百名収容です。ホールが埋らないと当会の面目が立ちません。満席を目指してふるってご参加下さい。

※終了後懇親会を催します。

七月特別講演会

『中世の山城について』

七月に広島県立歴史博物館（福山市西町）講堂で実施される、備陽史探訪の会主催（県立博物館主催）の特別講演会の実施要項が決定致しました。講師は、中世城郭研究会の本田昇氏です。

本田氏は中世山城研究では草分け的存在で、全国の山城を踏査されています。最近では、昨春秋、本郷町の新高山城へ図面作成のために備後地域を訪れておられます。講演の演題は、もちろん「中世山城について」です。山城研究の最先端情報もお話して頂けると幸いです。

《実施要項》

- ・日時 七月十二日（土）
午後二時より三時半
- ・講師 本田昇氏
（中世城郭研究会）
- ・場所 県立歴史博物館講堂

るのは当然である。②の神は大国主命のことである。この日本国土で生え抜きの神で、原初の国作りの神である。③は小人神であるが大国主命を助けて国作りをなし、特に医療、穀霊を司り、常世の国にかえるという永遠の生命の象徴である。④は伊勢外宮の豊受大神に象徴される食物の神で、稲荷神とも関連がある。⑤の「ハニヤス」は土を練って柔らかくするの意で、土作りは農の基本だという現代の篤農精神にマッチするような神である。この神は夫婦神であるがどこでも女神の名しかない。子を生み、育てる女性の霊力を象徴したものであろう。この五角柱ジジン様は近世中期以降、国学の隆盛と関連するので、発生的には遅く大正期に建てられたものもあるといわれている。

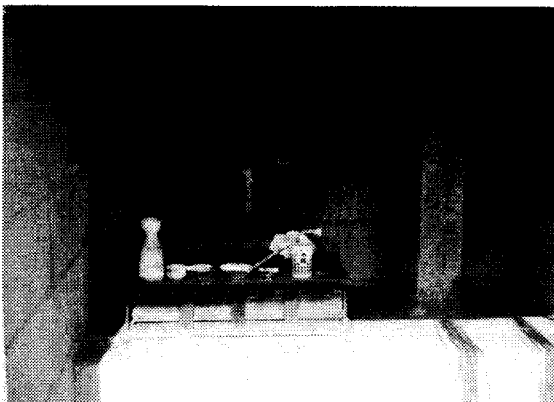
農民の生活の中に堅く根付いていた地神講(社日講)は、現在では大きく様変わりしているが、春先には大抵の「ジジンサン」には新しい注連縄がかかっているのを見ると、心なごむおもいがする。社日が何日かなど探る手がかりもないこの頃である。ちなみに、今年(平成九年)は三月十七日であった。

以上二型式の地神塔をみてきたが、私の住居地、福山市千田町には少し

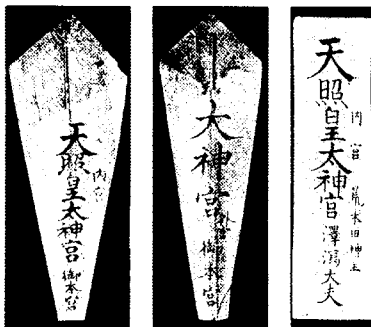
変わった「ジジンサマ」があることが分かった。変わったと言っても五角柱の形に変わりはない。そのジジンサマがあるのは、千田向西の丸池の堤に金比羅塔や天神さんと並んで立っている。

変わっているのはその五角柱に彫られた神名である。そこには誠に奇妙な神名がある。①天照皇大神宮②少毘古那命神③笹倉尊神④土祖神⑤蛇魂神の五神名になっている。皇大神宮という呼称がいつ頃できるのか、又、天照大神神という神名どうなのかをみると、近世に入って伊勢神宮の御師(おし)の活躍により伊勢信仰が普及し、爆発的な「お陰参り」が起ってくる。その頃御師が配布した大麻や、お陰参りの祓大麻に「天照大神宮」の名称がみられる。お陰参りは既に寛永十五年(一六三八)の記録があるのでかなり早い時期に「天照大神宮」という社名は一般化していたのであろう。神名を彫らないで、神宮名をいれたのは御師の配布した大麻の影響とみられる。②の少毘古那命神は文字が違うだけで、他地方のものと異ならない。③の神名は神道辞典に見当たらない。但し笹倉神社があるのでその項を見ると「笹倉(シノクラ)神社をみよ:」

とあった。その項をみると(イ)笹座(シノクラ)神社……福井県大野郡大野町字笹座(県社)……大己貴命を主神とし、豊受姫命・少彦名命・木花咲夜姫命・市杵島姫命を配祀する。……(ロ)笹倉神社……岐阜県山県郡葛原村山戸(郷社)・大己貴命を祀る。越前国大野郡の式内社笹座神社の分霊とあり、両者は本来同一の神社であった。いずれも大己貴命主神とする社である。ジジン塔の五神に関連するような気もするが「ササクラ」と「オオムナチ」との結び付きは分からない。遠い中部地方でなく、この近くにも「ササク



ラシノクラオオムナチ」の神社があるのではないだろうか。④の神名は神名はジジンサンの神名としては一応うなづけるが、これは「道祖神」と「ジジン」が神仏混淆した例(岡山県川上町)に近いものとみてよいと思う。「ツチの祖」と言えば「ツチの霊」につながる神を想定できるが、一方でいつも村の入口、道を守ってくれる「道祖神」のイメージがだぶって「ドソシン」と言うユニークな神名を創作したのではないだろうか。⑤の神名は誤字で正しくは蚪・虬蛟などの字を充てる。訓は「ミツチ」と読む。古くは濁らないで「ミツチ」と言った。「ミ」は「水」、「ツ」は「ノ」、「チ」は霊をあらわし「水の霊」と言うことになる。



おみ参りに降ったお祓大麻

江戸時代の江方殿

想像上の動物で蛇に似て長く、角と四本の足がある。水中に住み毒気を吐いて人を害する（大辞泉）神で、粗末すると祟りをなす自然の本質である。千田沼として二十世紀の今日まで人々を悩ました湿潤地帯でこの神に特別な思いをかけて祈ったのであろう。

今年の社日にもこの「ジジンサン」には、ま新しい注連縄が飾られていた。

※この稿をまとめるにあたって『古典と民俗』所収の「地神塔覓書Ⅱ 西岡陽子」の論文を一部参考にさせていただきました。

会報第七八号原稿募集

「備陽史探訪」第七八号の原稿を募集します。内容は自由で一行十六文字×一二〇行以内でお願いします。なるべく沢山の方の原稿を掲載するために字数厳守でお願いします。

今まで原稿を書いたことのない方、一度書いてみませんか。編集者は新しい方の原稿を心待ちにしています。

次号の編集は、「磐座亭主人」さんの担当になります。

きけ わだつみのこえ

石井しおり

二日前に「石井さん、突然にお電話を申し上げますが、私はあなたが卒業されたM女学校、現在は高校ですがそれを五年前に定年退職したKです。」と申され、「同じ町内でもあり卒業者名簿からあなたのことは存じておりました。」とのことである。

このたび学校の百十年史を発行するにあたり、調査していたところ、「きけ、わだつみのこえ」に収録された教師の存在が判明し、奉職年を計算してみるとあなた達が教え子であると確認した。「何か記憶に残っていないかと祈らんばかりの気持ちなのです。」と、熱い思いが伝わってくる。

えーっ、と驚きつつ頭の中は逆反転、セピア色の群像のなから色鮮やかに浮かんでくる面影。

私の十四才の時、日大出のピカピカの彼は新任早々、われわれの担任となった。色白で上背のある、ちよつとシャイな面ざし、国語・英語の先生で、当時の女学生には眼の覚めるような存在だった。生徒達の憧れの心意気は二教科の成績を急上昇させてしまった。が、それも半年あまり

で、召集令状、まもなく戦地へ発たれた。

クラスのことで教員室へよく出入りしていた私は、せっせと軍事郵便を送り、友人と慰問袋の荷造りをした記憶がある。それから数カ月してわが家へ先生の手紙と写真が届いた。戦闘服が大分馴染んだ下士官服のスナップでも温顔は以前と同じだった。

トーチカを後ろに立つ写真の裏面に「この銃口で私も命を落とすでしょう」と書いてあった。それを見て動転したものの、軍国主義一辺倒の当時、物議を醸してはならないと、必死に思って友人にも語らなかつた。

私の卒業年に先生の戦死広報を知り、戦いの巷には苦しいことばかり続いた。そして終戦の八月十五日の一週間前、福山大空襲に遭って、私の晴れ着の写真と一緒に収めてあった野戦服の写真も灰塵に帰してしまつた。

あれから五十五年。戦いの合間にしたためられた師の君の遺作のうち佐高信氏の編集による『男のうた』の中の

「激しい春雷の中で、先程まで共に戦った戦友を土中に埋めて、最後の敬礼を捧げる」の詩。きびしい検問の目をくぐり、遺族の元へ帰ったこ

の数編の詩の魂の恐ろしさ。

二日前に知つたばかりのこの重いものに突き上げられて、私は幾世代への結び目として生きたくもりだった自分が、何を成してきたかと嘖む。数多の才能に恵まれながら、良き時代に会えないまま、二十六才の若さで戦死しなければならなかつた先生の無念さは、いかばかりであつたろう。

「きけ、わだつみのこえ」が聴こえてくる。晩春のしじまを通して。

第六回郷土史講座

応仁文明期の 山内首藤氏について

六月の郷土史講座は、満を持して出内城郭部会長の登場です。今回のテーマは、出内先生のライフワークである山内首藤氏について応仁文明期の国人領主への発展過程お話しして頂きます。ふるってご参加ください。

《実施要項》

- ・日時 六月二十八日(土) 午後二時より
- ・講師 出内城郭部会長
- ・場所 中央公民館視聴覚室
- ・会費 資料代百円程度

黄河の旅 2

神原 正昭

今回は青海湖付近について書いてみる。バスは海拔三三〇〇メートルの高地を走っておりバスの中は寒いぐらいである。昼近くに青海湖に着くがあまりに大きいので海と錯覚するほどである。湖あくまで青く美しい湖である。大きさは琵琶湖の七倍ほどあり、石と砂と渚が広がり打ち寄せている波を見ていると本当に海と変わらない。なんで黄土高原の海拔三三〇〇メートルの高地に湖が出来たのか不思議である。

ここで、専門家の松崎先生の登場である。松崎先生によると、約二億年前、原始大陸パンゲアが分裂と移動を始め、インド亜大陸が今のユーラシア大陸にぶつかったものだから大陸は湾曲しながら隆起し大半が陸地となって高いところが山脈、低いところが海や湖、平原となった。ヒマラヤ山脈も同様である。

ここの湖は中国一大きな塩水湖であり、また塩分は海水より濃い五％である。そのためプランクトンも発生しないので水はきれいに澄んでおり美しいエメラルドグリーンを保っている。

ている。

岸壁の上から水を覗くと魚が泳いでいるので現場のガイドに聞くと、魚と呼ばれる鱗のない魚とのこと、プランクトンがないのに何を餌にして生きているのか不思議であると思っていたら、大きな鯉魚が小さな鯉魚を食って生きているという。まさに弱肉強食の自然の摂理である。ちなみにこの魚が成魚になるまでに一〇年かかる。

青海湖の中に鳥島がありこれを見学に行く予定が直前になって後回しになる。この島は春から初夏にかけて雁や白鳥などの楽園で何十種何万羽にも及ぶ鳥の群れが飛来してくることで有名である。

まずこの付近にある羊やヤクを放している湖東牧場というところから見学することになる。ここで一つの包に入って見学させてもらうことにする。観光用でなく現地の人々が普通に生活している包である。私は以前カザフスタンで包の生活を見たことがあるが、少し観光のところがあつたが今回は生活感のあるものが見られるのでチャンスである。六月末であるが草原は風が吹いて早く中へ入れてくれぬかと思いがら見ているとガイドと包の女性が交渉している。ややあつて交渉成立、よ

うやく中に入れる。包の中は暖かい。中には五〇歳ぐらいの女性と、二〇〜三〇歳ぐらいの女性と男の赤ちゃん三人暮らして男性は出稼ぎで留守である。

まず挨拶といつてもチベット語だからわからない。ヤクの乳から作ったバター入りのお茶を出してくれたがこれがまるやかでなかなか美味しい。はて、この辺りに木は見当たらないので何で茶を沸かしていたのかと思つて辺りを見回すと、所狭しと石炭を小さく砕いたようなものがあり、何かと思つていたら、羊・ヤクの糞を乾燥したものであつた。いやな臭みはなく炎は青くちよろちよろとよい具合に燃えている。物の煮炊き、暖房用と自然の物を無駄なく使っている。主食はナンとヤクの乾肉で、この乾肉を食べてみるとすめイカを油に漬けたようで硬くて日本人には向かない。

トイレを使用したくなり辺りを見回したところそれらしきものは見当たらない。ガイドに話をするとシャベルを持ってきて終わったらこれで砂をかけとけばよい。するとこれが肥料になると言う。ここで男性・女性の数人が使用する。包の人に日本から持ってきたティッシュペーパー・鉛玉などをプレゼントすると喜んで

いた。今でもその笑顔が思い出される。

私たちが便利性だけを追求した生活が文化生活だと思つているが果たしてそうであろうかと考えさせられる。

ところで話は余談になるが、ガイドの言うには日本人程良くトイレに行く人種もないそうである。身体の構造が生来潔癖性なのか、それとも異常に神経質なのか何度もトイレに行きたいという感覚は異国人には理解しがたいものであるらしい。私は以前中央アジアを旅行したときもロシア人の女性ガイドは、一〇時間以上も砂漠の中を走つたことがあつたが、そのガイドは一度もトイレに行かなかつた。私たちは何度かバスの外に散つて行つたことを思い出す包の見学も終わりこの人達にさよならをして昼食の場所へ移動する。十三時。

尾市十字古墳を訪ねて

藤井 節子

わが郷の杏けきロマン思はせて
尾市山上に十字の古墳

女室のすき間に残る漆喰の

いろ古さびて古代はせまる

素人の古代史発掘

縄文甌推考

小林 定市

縄文時代後期の、中津式土器や津雲上層土器などと無文土器が出土する層から、四ツに割れた土器の低部が発見され、水洗いしてみると甌と推定出来る形をしていた。(甌は穀類を蒸すのに用いる底に蒸気を通す穴がある土器)場所は洗谷貝塚に程近い近辺の畑の耕作地。

正確な年月は記憶していないが昭和四十六年頃、福山市水呑町の洗谷随入地区では土地区画整理が進められ、区画整理の土地換地のため、私の家の前の畑に肥壺を掘った時、土中よりかなりの量の土器片が出土した事があった。

当時は歴史に全く関心が無かったので、別段気にも留めていなかったが、最近になって畑の底に眠る土器が何時の時代の物か知りたくなり、本年二月二十四日から、肥壺を破却して其の周辺部を数日間かけて発掘したところ、畑の表土より約1m下の地層から、貝殻の出土は見られなかったが、縄文式土器(約10kg)・敲石・石錘・石鏃・石刃・サヌカイト剥片・大分県姫島産黒曜石(灰白

色)の石鏃等の地層から、甌と推定できる土器の底部のみが出土したのである。底部の直径は9cmで穴数は十六ヶあり下部横面にも穴跡が見られ、穴は棒状のものを内側から外側に向けて押してあけられ、土器の胴部と口縁部は繋がっていないかったため形状と文様は共に不明であった。また、発掘場所は春の野菜を植えるため間もなく埋め戻した。

一般的な日本に於ける最初の甌文化は、古墳時代の須恵器・土師器に依る甌と龕が一組になった土器の出土が見られ、文献史学でも『日本書記』に大化二年(六四六)三月甲申の詔に「有百姓、就他借甌炊飯、其甌触物而覆、於是、甌主乃使祓除」と当時は甌が普及していた。



しかし、福山地方の遺跡からは縄文土器と共に甌が発見されていたのであるが、深く追求されていないかったためその土器片が甌であるとの推定判断は下されていない。

太田貝塚では「底部に焜炉のごとき小孔を無数にあげたもの」が出土しているし、木之庄貝塚でも「底部が上げ底の焜炉のように無数の小穴を有するもの」との記録と図形が見られる事から、三遺跡から同じ甌土器の出土が見られたのである。

最初は土器に依って食物の煮炊きを行っていた縄文人が、いつの間にか間接熱を伝えて穀類等を蒸す技術を身に付け、日々の生活に利用して

醸造用にも用いていたとも考えられる。こうした縄文人の知恵の高さは驚くばかりで、従来からの縄文文化の常識に就いての通説は、当然見直しを受けるべきであろう。

親子古墳巡り参加記

佐藤 祐司

今回、古墳を見に行こうと思った理由は二つありました。一つは、僕たちが住んでいる近くに古墳があるので見たいと思ったこと、もう一つは、自分の目で古墳を見てみたかったことなのです。

一番始めに行った北塚古墳は、自分の思っていた古墳と、少し違っていたので驚きました。古墳と聞くと、中学校や小学校の授業で習う前方後円墳を思ってしまうけど、古墳は、前方後円墳だけではないと言うことです。

最後に行った二子塚古墳は前方後円墳でした。石室に行くまでが狭いため、はっぴいかなくは、いけませんでした。石室に着くと、とても大きな石が二枚たって、天井を支えていました。

本来あまり見ることのない古墳が見れたので、いい経験になったし、いい思い出にもなったので、良かったです。

七夕歌と古事記

佐藤 壽夫

歴史研の「古事記を読む会」も回を重ねて二十九回(平成九年四月十九日)をむかえた。

「古事記」・(「日本書紀」)の歌謡第一番に歌われている、いわゆる「八雲立つ・・・」の歌謡に続いて二番目に登場するのが、沼河比売求婚の歌である。(「古事記」)

八千矛の 神の命は 八島国 妻枕きかねて 遠遠し 高志の国に賢し女を ありと聞かして 麗し女を ありと聞こして さ婚ひにあり立たし 婚ひに あり通はせ・・・

続いて、沼河比売の返歌が続く、第三歌謡、第四歌謡と。

青山に 日が隠らば ぬばたまの夜は出でなむ 朝日の 笑み栄え来て 栲綱の 白き腕 沫雪の 若やる胸を そだたき たたきまがなり

眞玉手 玉手さし枕き 百長に 寝は寝さむを あやにな戀ひ聞こし 八千矛の 神の命 事の 言語も 是をば(四)とうたひき。故、その夜は合わずて、明日の夜、御合したまひき。

さて、この第四歌謡の歌の中に、(傍線をひいた)眞玉手 玉手さし

枕きの言葉は古事記校注(倉野憲司著)では説明がない。従来の古事記校注では、そのほとんどが、「わたしの美しい手を手枕として」とか、「玉のようなお手で抱きしめて」などの注釈しかない。

私は、「古事記を読む会」に参加していつも思うことは、先輩や、偉い学者の方々が過去に述べているから、いや、文献に書かれているからと言う考えや認識はしたくない。現存する「古事記」の原本はない。

「古事記」を写写するときには誤読や誤写もあつたとおもう。また、校注や解釈も人それぞれ同じとは言えない。

私たちが教本として使っている、岩波文庫「古事記」の原文は古典文学大系に見られる原文である。

巻末にその原文があるが面白いことに先ほどの、「眞玉手 玉手さし枕き」の原文漢字表記は「麻多麻傳多麻傳佐斯麻岐」となっている。

このいかめしい呪文のような「古事記」の漢字表記からはどう考えてみても、いかにも麗しい女性の両腕のイメージは湧いてこない。ましてや、原文の漢字表記に、玉とか、手とかの漢字は一切使用されていない。

過去の「古事記」校注者、本居宣

長の「古事記伝」も原文の漢字表記を「眞玉手 玉手さし枕き」と訳注したとは思えない。

「麻多麻傳 多麻傳佐斯麻岐」の解釈は「万葉集」の「巻八の一五二〇」山上憶良の「七夕歌」の中で書き替たのではないのでしょうか。

七夕歌 (万葉仮名)

牽牛者 織女等 天地之 別時由

伊奈牟之呂 河向立 思空

不安久尔 嘆空 不安久尔

青浪尔 望者多要奴 白雲尔

啼者尽奴 如是耳也 伊伎都积乎

良牟 如是耳也 恋都追安良牟

佐丹塗之 小舟毛賀茂 玉纏之

真可伊毛我母 一伝 小棹毛何毛

朝奈伎尔 伊可伎渡夕塩尔 一伝

夕倍尔毛 伊許芸渡 久方之

天河原尔 天飛也 領巾可多思吉

眞玉手乃 玉手指更 余宿毛(余夜毛)

寐而師可聞(宿毛寐而師可聞) 一伝、伊毛左称而師如

秋尔安良受登母 一伝、秋不待登毛

(一)内は「新版・新校万葉集」の万葉仮名表記

《従来の七夕歌の解釈は》

彦星は 織女と

天地の 別れし時ゆ いなむしろ

川に向き立ち 思うそら

安けむくな 嘆くそら

安けむくな 青波に 望みは絶えぬ 白雲に 涙は尺きぬ かくのみや

息つき居らむ かくのみや 恋ひつつあらむ さ丹塗りの

小舟もがも 玉巻きの 小舟もがも へーに云ふ 「小棹

もがも」朝なきに

いかき渡り 夕潮にへーに云ふ、

「夕にも」

い漕ぎ渡り ひさかたの

天の川原に 天飛ぶや

領巾片敷き ま玉手の

玉手さし交へ あまた夜も

寝ねてしかも へーに云ふ、

「眠もさ寝てしか」

秋にあらずとも へーに云ふ、

「秋待たずとも」

山上憶良(六六〇〜七三三?)は、

十二首の七夕歌を「万葉集」に残しています。

このうちの第一作、巻八の一五二

八歌は、養老八年(七二四年)七月

七日、聖武天皇の命により詠んだも

のとされています。しかし、養老八

年は、「神亀元年」であり、聖武天皇

が即位したのはこの年の二月四日な

ので、厳密に言えば神亀元年七月七

日に詠んだこととなります。

ここでとりあげた七夕歌第三作、
卷八の一五二〇歌は先ほどの漢詩風
の長歌です。

さて、この七夕歌は、リアルな性
表現の極致を歌った、あくまでも愛
を前提としたセックス。キスなどの
愛撫から始め、こまごまと体位やら
パス・コントロールの仕方まで教え
ていると解説したのは、韓国の女流
文学者・李寧熙(イ・ヨンヒ) 女史

の著書『もう一つの万葉集』である。
女史の解説では『万葉集』の山上憶
良作の七夕歌は、『古事記』(上巻)
大國主神のくだりに登場する「沼河
比売とのさ婚い」や、「適后須勢理毘
売命の神語」における描写をとり入
れているのです。「真玉手の玉手さし
交へ…」のあの有名な部分です。

七夕歌の表記は
「真玉手乃 玉手指更」です。
日本古典文学全集では、
「真玉手の玉手さし交へ……」
と訳されています。

それに対して『古事記』の表記では
「麻多麻傳 多麻傳佐斯麻岐」
です。「真玉手 玉手さし枕さ」は
岩波文庫・倉野憲司著です。
ずいぶん漢字表記も違いますね。
このくだりの原詩(古代韓国語)
Ⅱ史読(いど)・史読文(いどむん)
で読むと。

真玉手乃(当てあわす)
へまつだまつでね
玉手(合わせ終うた)
へだまつでん

指更(股の牽へ陰茎の意)
へさちこう(ぎよん)となり。
「真玉手乃 玉手 指更」を史読
式で読むと次のようになります。
「合わせましよう 合わせ終え
た股の茎は、」となります。

次に、七夕歌の万葉集仮名は、
「余宿家(余夜毛) 寐而師可聞
(宿毛寐而師可聞) 一云、伊毛左祢
而師加 秋尔安良受登母 一云、
秋不待登毛」となっています。

このくだりを史読で読むと、
余宿毛(余夜毛) (咎めなさるな)
へなむらじやまおへなむれまお
寐而(たやすく)
へしいい
(宿毛寐而) (誤って)
へじやるもつしり
師可聞(洩らして行く)・射精して
へさがむん
伊毛左祢而師加(この端に洩らそう
へいもさりえさか)か・射精しよう
秋(子供) か
へあぎ

尔安良(産むかもしれない)
へのあるら
受登母(ひよつとすると)
へおとうも
秋不待登毛(子供ができなかったよ)
へあぎあにでどうも

このくだりを直訳すると。
咎めないでください。
たやすく(誤って)洩らしたりす
ると(この端に洩らしようか)
赤ちゃんが出来るかも知れません
から(赤ちゃんが出来ませんよ)

七夕歌は、なんとリアルな性教育
を教えたテキストであったのではな
いでしょうか。
山上憶良は、百済の医師、「憶仁の
子である。」ここに使われている韓国
語はおおむね新羅言葉である。
百済系の憶良が、なぜ新羅言葉で
歌を詠んでいるのでしょうか。

考えられるのは、当時の日本には
新羅系、伽耶系集団の居住地があり
憶良はその居住地で育ったのかもしれ
ません。あるいは百済・高句麗を
征服した新羅の勢力が、当時非常に
強力であったので、日本の宮廷でも
新羅言葉が使われていたのかもしれ
ません。

とにかく、この七夕歌は、当時の
宮廷の皇子たち、または皇族の少年
少女のための「文学教育兼性教育用
教材として意図的に作られたもので
はないでしょうか。『古事記』の故事
まで引用している七夕文学でセック
スの手ほどきなら、なんと素晴らし
い芸術の香り高き性教育であったこ
とでしょう。

現在の私たちは七夕歌さえ、殆ど
知らないのが現状です。
七夕の物語も、七月七日の行事に
子供心に教えてもらった記憶がある
程度です。遠い昔に、この歌が、当
時の少年少女にどのように歌われた
のか興味をおぼえます。

李寧熙女史が解説されたように、
この七夕歌が教材ならば、万葉歌人
の山上憶良は偉大な文学者であった
のだな、とあらためて感心しまし
た。

(注) 参考文献
『もう一つの万葉集』
李寧熙著(文芸春秋)

中古夫婦が中古マイカーに乗る ヒタチの国で日の出を拝む

門田 幸男

人は何を求めて旅に出るのか。それは日常からの脱出ではなかるうか。平常目にするのではない美しい或は珍しい風物や特異な習俗等を見たり触れたりする事であったり、普段口にする事の出来ない珍珠佳肴を味わうことであつたり、又、永く合うこととのなかつた友人・知人に会つて楽しい一刻を過ごしたりするわけだ。

まもなくマイカーを操つて遠路の旅が出来なくなると予測されるこのごろ、意を決して関東周辺を一巡する旅に出た。宇都宮で小用を済ませ第一の目的地・太子町の袋田の滝を見物する。最近トンネルを掘つて滝の正面に見物場所を作つてあつたので豪壮な風景を堪能することができた。次いで水戸の偕楽園を見物するべく向かつたが、到着した時はもう夕刻となり、多分閉門している事と考へられたので、またの機会に譲り普段見ることの無い太平洋岸に向かつた。茨城県は古名をヒタチと名付けられていたから太陽が登る所と意識されていたのだから。そこで大洗磯前神社で日の出を拝することに

した。この神社の祭神はオオナムチと少彦名神だそうだから海の彼方のトコヨの国から訪れた少彦名神が第一歩を印したのがこの地なのだと考へられていたのかもしれない。

日の出と少彦名神を拝んだ後、かがいでも名高い筑波山へ向かつた。時移り世の中忙しい時代になつたから異性相手に言問う事は望むべくもありませんが、一度は行つて見たいと思つていたところだ。登山道に登つて終着地点で探しても筑波山神社が見当たりません。よくよく探すとここより二キロとの表示を見つけて早速山道を辿りましたが、行つてびっくり段数千以上もある下り坂です。看板に上下の位置関係も表示するのが親切というものです。神社に着いてまたびっくり。周辺には人家もあり、道路もあるから迂回すれば車で行けたのです。駐車場までの上り坂のなんとキツかつた事か。調査不足が汗を流し時間の浪費に繋がつた一幕でした。

ました。ナント直径三十センチ程の丸石です。埋もれている部分は地下深く大きいのだとありますが、ホントかねと首を傾げたくなる石でした。石で迫力があるのは高砂の石の宝殿などはすごい大きさですよ。

悪口はやめましょう。銚子の犬吠埼灯台でも一度水平線を眺めてから九十九里浜を南下して、次の目的地・鎌倉へ渡るべく金屋に向かいました。日本という国も旅をしてみるところづく広いと感じています。筑波山で無駄な時間を費やしたので日蓮上人誕生寺や鋸山の日本寺もあきらめてひたすら金谷へ走つたのに到着した時、午後七時丁度フェリーが出航したところでした。平清盛じゃないからフェリーを呼び返す事もできず、次の便を待つこととし、次の出航時間を聞くと明朝六時半だとのこと、さつき出たのが最終便だったのです。アア残念無念旅行案内等を買つてフェリーの運行時間を確認してみれば、間に合うように意識して走ることも出来たのに出費を惜しむと無残な結果をもたらすのだとつくづく思い知らされることになりました。

権力者が命令すれば海岸から一直線に参道も付けられるけれど、それでも刺客に襲われたのだから身の安全を確保するのは難しいものなのですねえ。現代の警察庁長官もあやうく殺されることだつたものねえ。

さて鎌倉を後にして、江の島・城ヶ島と三浦半島を巡り、観音崎水神社に参拝しました。ここから海を眺めると平穏そのもので浦賀水道を渡れなかつたのは、波ではなくて潮流が速かつたから流されてしまつたのではないかと疑問に思いました。横浜の西隣り大和市に住む旧友宅を訪ねて、翌日、弟橋姫(走水神社の祭神)を拝んだ事との釣合ひ上、名古屋の熱田神宮を目指しました。名古屋について驚くことは、神社や仏閣などの名所案内の標識が無いのです。あるのは駅とか各種のお役所の案内板だけが目につきました。他所者に冷たい街だなあと思いました。また、榎原熱田神宮など国家神道のおいがか残つていて、まるで旧日本軍兵舎か憲兵駐屯所の中を歩いていく感じがするのですが、私の思い過ぎなのでしょう。

査定評価額三万円の中古車(現在走行距離六万二千キロ)でも元気に走り通してくれましたが、運転手である私の肩が故障しました。私は価

格が安くて燃費も良く、手足と頭を使うのでマニュアルの車を選んだのですが、大都会を走るとやたらと信号で止められるため、サイドブレーキとギアチェンジに左腕を酷使することになった為のようです。老人はオートマチック車を選ぶべきなのかもしれませんねえ。この運転手も大都会で迷ったりしなければ、まだまだ使えると思いますが、遠距離旅行は交替の運転手を同行するのが安全策です。

正福寺裏山の 土壙墓を訪ねて

藤井 節子

土壙墓の春の光に息づきて

いま日の目みる吉備の山上

土壙墓を統ぶる長らしき石棺の

枕石北に巖然とあり

弥生なる人の頭支えし石枕

生なまとも見る石の窪みを

石棺に魔除けの朱の色残りいて

弥生人らの祈り伝ふる

ミニ旅行の収穫Ⅱ

熊谷 操子

四月十七日、十八日は河内長野観心寺の如意輪観音のご開扉とあって長い間この日を待ち構えていた。近鉄電車に乗ると、私はいつも、「只今帰りました」と言いたくなるような気がする。それは窓外の景色からだろうか。まるで親許へ帰ってきたような安堵感なのである。

寺に着いたのは午前九時半。秘宝である本尊の拝観は十時からと言うのに、境内は何故かひっそりとしている。イライラしながら、また心をときめかしながらも、ともあれ、時間つぶしに霊宝館内の仏像群を先に拝観することにした。

大阪府下で最古の国宝建造物と言われる金堂の、その正面にある八角鉄燈籠の火袋には、四天王の姿が鋳表されている。その面白さにはしばしば見とれていたが、足許に石で囲った不思議な座のあるのに気付き、「これはなに？」と一瞬疑問に思った。由緒書と寺の説明に依ると、そこは、八〇八年に空海が北斗七星を祈った場所で、そのことに依って本

尊を如意輪観音に決めたとか。故に正しくは、七星如意輪観音と呼ぶそうである。

金堂内陣に足を踏み入れて先ず驚いたのは、両界曼陀羅の板壁の大きさであった。厨子を正面にしてその手前に東西に向き合った姿。それは天井から堂々と連らなっていて、支える太い柱にも曼陀羅の紋様が麗しく画いてある。そしてその裏側にはそれぞれ四天王の勇姿が見事に描かれていて、思わず吸い込まれるような感動の一瞬であった。柱も金堂の創建時のままであると言う。この美術的な板壁は、真言密教の曼陀羅供養を行うための装置とか。

何メートルぐらいあったかは覚えていないが、秘宝との距離はかなりあったように思う。

「ここから前に出ないで下さい」という寺側の注意を、みんな行儀よく忠実に守っていた。これが国宝を傷つけないようにとの配慮の距離なのであろう。

「折角遠くから来たのに、もう少し前で拝観させてくれたら……」と、私は心の中でクレームを付けていた。国宝だからこそ近くでじっくり観たい、そんな矛盾の去来をどう

することも出来なかった。

家にある写真ほど細部まではつきり見えないので、なにかしら靴の上から足の裏を搔くような、そんなもどかしさを感じながらも、

「私は今、実物の前にいるのだ」という実感がひしひしと押し寄せる。隣席の人は先程からオペラグラスを手離すことなく、角度を僅かづつ変えながら、一生懸命覗いている。私はたまりかねて、

「お済になりましたら……」と遠慮なく頼んでみる。こんな時には遠慮などしては居れないのがわたし。矯めつ眇めつよく見ると、平素は厨子の中に鎮座ましましていただけあって、一一五〇余年も経っている。息を呑む思いとは、まさにこの事が替辞はもうその息の奥に追いやられて、只々感動の溜息のみである。

女性的な豊満さを持つ唇から顎の線にかけて、言うに言えない上品な気色みたいなものを感じ、その深い魅力はたとえようもない。左の足裏にそっと重ねた輪王坐の右足も、たつぷりとした肉取りでふくよかな線を見せ、ゆつたり構えたごく自然な体軀からは、人肌の温もりを感じるような親近感さえ持っているのである。

空海が請来した胎藏曼陀羅の観音院の中に定着している如意輪観音の図像を、直接の規範として忠実に造らせた作品だけあって、六臂のつけ根も、ごくごく自然で均衡を保った美しさを充分に見せている。

右手第一手は頬に当てた思惟手

右手第二手の持ち物は如意宝珠

右手第三手は二重にした念珠

左手第一手は体側について光明山

左手第二手は蓮華を持つ

左手第三手は輪宝

家にある写真でよく見ると、この輪宝は人差指の先に乗っている。それぞれの持ち物や手の勢にその働きが示されていて、即ち生きるものすべてに対する慈悲の心、一切の願いを満たす力、衆生救済する力、諸々の邪悪を浄める力、最高の教えを説くことなどを表しているということである。

臂訓、腕訓もあまりけばけばしくなく控えめであるという点も、私めにはとても好ましく感じられた。ただ光背周辺の輪宝火焰光の朱色がどうも気になって質問してみると、

「これだけは後補のものです」とのことだった。

曼陀羅の図像では、顔は大分右に傾けられているが、この像の場合は殆んど真つすぐである。これは阿闍梨（私は空海の弟子真紹だと思ふ）の特別な

指示によつたものではないかと思つてゐるが、あるいは仏師の好みであつたかも知れない。

ちなみに、近頃の有名な如意輪観音の顔の位置を調べてみると、真つすぐなのは割合少なく、滋賀県の石山寺、奈良県の岡寺・室生寺、国立奈良博物館等である。傾けているのは奈良県の法隆寺、京都府の醍醐寺・大報恩寺、奈良県の橘寺、兵庫県の神呪寺、茨城県の小松寺などに見られる。

本体は櫃で造られているが、宝冠は椀で、よくこんな細やかな透かし彫りが出来てなと思うほど見事な仕事である。この素晴らしく流麗な紋様が守護寺の五大虚空蔵菩薩の宝冠と似ている点だけを取り上げてみても、両寺の仏像の造立年代に対する私めの疑問は深まつてゆくのである。

さて、そのいちばん大きい疑問は顔立ち、首から肩にかけての肉感、それに手の指の形等々、両像それぞれがそっくりさんなのである。かてて加えて教王護国寺（東寺）の羯闍曼荼羅中の東側に位置する五菩薩の顔も大変よく似ている。その上まだつけ加えることすれば、法華寺の十二面観音像が挙げられる。

空海が観心寺の境域を設定するまでに至つた風景観は、早くからそのの中に育てていたのだろう。

それは京都東寺（神護寺も含む）と高野山（金剛峯寺）を結ぶ一線の南北軸線の中程（実際は少し南）に真言密教の花をもう一つ開かせてみようという構想を練つたと思う。その構想を見事支えたのが、門下第一人者として手腕を振るつた実恵（空海と同じ讃岐の出身）であつたかも知れない。けれども八三五年に空海が高野山に入寂してからは、これら寺院の実務の重責を担つた実恵は、あまりにも多忙すぎる。その上、嵯峨太皇太后（檀林皇后・橘嘉智子）の関わりも大いにあつて、とても河内山中の観心寺の創立及び造像は不可能に近いと私は思う。

相当信頼性の高いと言われている「観心寺勸縁録起資財帳」と称する文書には、創立に関して二人の名を挙げてゐるとか。

神護寺虚空蔵菩薩が、かりに八三六年―八四八年に造立され（これに就いても専門家達の間で多少の年代のズレがある）、真紹が八三九年に如意輪観音を造立したと仮定すると殆んど同年代の作品と考えられる。

真紹が河内の山中に入ったのが、八二四年で、以後一〇年余り住んでいたとあるから、金堂創立のための木材等も、随分研究していただけないだろうか。事実、観心寺近傍の山から座出

する椀等が、仏像彫刻に適するとあつて、八五七年には、ここで造立した五仏が京都に運ばれた記録が残つてゐるとか。当然、この寺にある多くの仏像群も、この工房で造られた事は言うまでもない。

福山敏男・村田隆照・西川新次・紺野俊夫・水野敬三郎・松浦正昭。諸氏に依る、彫刻、建築、一般史等それぞれ専門分野からの意見は、金堂創立年代が少しづつ異なつてゐるし、その創立者名が、実恵か英紹かそれも両説に分かれる。

余談であるが、この時期の確実な記録から残つてゐる仏師名は、天台関係では、天長七年（八三〇）に延暦寺の大日如来を造つた明定。貞観五年（八六三）に比叡山無動寺不動堂の不動明王を造つた仁算の名がある。醍醐寺釈迦堂本尊の作者である定恵・時仁・沙弥連興等の名も挙げられているとか。文字に残つてゐる名も少し、まして仏師名を彫つた作品も、この時期殆んどないらしい。

空海没後、大阿闍梨となつた実恵の掌握する中で、東寺工房（既に空海に依つて密教彫刻の豊かな表現力の質と構成力を蓄えられていたであろう）の表現力や経験を基体として、神護寺や観心寺にもそれなりの工房が設置されたのではないだろうか。

そしてその工房では、かつて東大寺
工房で腕をふるった伝統的な仏師が
密教図像に依って阿闍梨指導の許に
造像したのでろう。承和時代の造像
の開花は、空海の弟子達と仏師の驚
嘆に値する才能によって造り上げら
れた崇高なまでの造形芸術によるも
のである。

それは、奈良時代以来の木芯乾漆
像の伝統的な技術も生かして、特有の
一木製の主要部に乾漆塑形を行うと
いう新方式を取り入れた真言密教独
特な技を編み出したものである。

条帛や裳に至るまで、鮮やかな色彩を
残した感覚的な如意輪観音こそ、真言
密教彫刻の様式的完成を示した第一級の
作品であるという多数の評価は決して過
言ではないと思っている。

真紹は、真済の居る神護寺へも度々
足を運んでいたと思う。それは会報七
六号の拙稿にある点でも推察できる。
だとすれば、虚空蔵菩薩と観心寺如
意輪観音との間に相似点があったと
しても決して不思議はないのだと、私
は勝手な憶測をしている。

それにしても、エネルギッシュに生き
た空海の偉大さを、今回のミニ旅であ
らためて感じた。

この度、観心寺の如意輪観音へと私
の気持を駆り立てたものは、一月十三
日にお会いした神護寺の五大虚空蔵

菩薩との関連性であって、これは野
次馬根性の爆発に外ならない。
神籠る国

熊野路を行く

柿本 光明

かつて熊野三山（本宮大社、速玉
大社、那智大社）を目指して、各地
から多くの人々が熊野へ熊野へと何
故あこがれたのであろうか。

神武天皇が東征の際、八咫鳥が道
案内をしたことや、金の鴉が弓のさ
きにとまって敵の目をくらませたと
いう物語りは『古事記』にも出てい
るが、昔から神の籠る国……そのコ
モルが転じてクマノと言われた位
で、神の国と信じられ、中世以降、
神仏混淆して観音信仰の仏説に山岳
宗教の修験道が加わって、お熊野さ
んへ参ればよい修行になり極楽往生
出来ると思われられるようになった。

平安時代から江戸時代へかけて熊
野詣は全国的風潮となり、参詣者は
「蟻の熊野詣り」という言葉が生ま
れるほど後へ後へとつづいた。

さて、熊野へ入る道には伊勢路、
十津川街道、北野街道、高野街道、
紀伊路の五つの道があるが、杉木立
や自然林の続く静かな古道が続く中
をいにしえの人は何を想い、何を願
いながらこの険しい道を熊野へ向

かったのだらう。

平安朝の十世紀のはじめ、宇多法皇
の熊野詣ではじまり、多くの法皇や
上皇が熊野に詣でている。

- 宇多上皇 一回
- 花山上皇 二回
- 白河上皇 九回
- 鳥羽上皇 一八回
- 崇徳上皇 一回
- 後白河上皇 二八回
- 後鳥羽上皇 二八回
- 後嵯峨上皇 三回
- 龜山上皇 一回

院政時代には、本宮、新宮、那智
の三山詣には、紀伊路が主に利用さ
れた。

私も昭和三十年代に三回熊野詣を
したが、吉野から山路づたいに歩いた
こともあり、伊勢路から列車で訪れ
たこともあり、紀伊路をとったことも
ある。このたび五月十五日から一週
間、吉野熊野方面の取材・資料蒐集
のために南紀に行くことがあり、十五
日から三日間を紀伊田辺より中辺路
を辿り熊野本宮大社・熊野那智大
社・熊野速玉大社を詣でた。

紀伊田辺からの中辺路の古道は
山々の杉木立が想像したより古くな
く植林して二、三十年を経たように
想われた。時折山道は険しくなり、落
葉に埋つて屈折した道は、味わいがあ

る所が多い。路傍の杉木立の陰には石
仏がひっそりと立ち、森の奥には苦む
した社があつて、熊野古道の歴史の深
さを思わせる。

熊野への道筋の要所所には、熊野
九十九王子と呼ばれる王子社が点々
と建てられている。王子とは若一王子
のことで、熊野権現の末社にあたり、
ここから熊野権現を選擇し道中の安
全を祈つたのである。

王子社は休憩所、宿泊所的な性格
も兼ね合わせ、時には歌会なども催
された。八上王子は西牟串郡上富田
町字中鳥にあり、今は八上神社とし
て立派に祭られている。西行法師の
待ち来つる八上の桜咲きにけり

あらくおろすな三栖の山風
歌碑がある。水害や国道開通などで
鮎川王子の社地は削られ、僅かに趾地
が残る小社がある。富田川を隔てた
対岸には大塔ノ宮の剣を祭る剣神社
がある。石船川が富田川に合流する
ところ中辺町栖川大字に滝尻王子社
があり、五体王子の一つとして今も立
派に祭られている。昔は石船川対岸に
大きな館があり、歌御会も行われた
らしく熊野懐紙として残っている。能
登守源具親の山河水鳥

岩田川幾世の浪にすみなれて
渡れど残る鷺のひと声
正治二年（一一〇〇）十二月六日滝

尻王子歌御会の時の熊野懐紙である。

大門王子を過ぐると大坂本王子だ。その昔、参詣者たちが聖地へのあこがれを抱き、日本三大古道のひとつ大門坂の石畳や樹齢八〇〇年の夫婦杉などの景観に出会いながら歩くと、いつ

しか野中の一方杉の林の中に継桜王子の碑が建っているのが見える。この一方杉のすべての枝は那智大社のある南の方に向かって伸びているのが有名で不思議……だ？近くには秀衡桜の木がある。

鶯や御幸の輿もゆるめけん

新しく虚子の句碑が建っている。

箸折峠にさしかかると、花山上皇の姿といわれ、牛と馬二頭にまたがった僧服姿のカワイイ石像が目につく。

「苦しい時には牛のように粘り強く、楽しい時には馬のように軽快に」と熊野詣の歩き方を表わしたものと云われている。中ノ河王子、小広王子、熊瀬川王子、岩神王子、湯川王子と現世極楽にいたる険しい山道を踏みほり、はるかな熊野にむかった昔人の姿が思い浮ばれる。ここ湯川の里は湯川一族の発祥地である。

熊野九十九王子社の九十九とは数の多さを表現したもので、正確に九十九カ所あったというわけではない。時代とともに衰退したり、位置が変わったりしたものもあるが、摂津で四社、

和泉で一八社、紀伊で七二社、計九十

四社であったことが現在分かっている。九十九王子社のうち、泉州の初井、紀州の藤白、切目、滝尻、発心門の五社は五体王子として特に地位が高く重要視されている。

発心門王子は、藤原定家卿が「明月記」の中で——この王子はまことに立派で神々しく、思わず信心をおこすほどだ。社殿の上には木々が生い茂り、それがごとごとく紅葉し、折からの風に翻って荘厳華麗な初冬の風情である——と述べているように、数ある王子社の中でも「五躰王子」の一つとして別格の崇敬を受けている。

うれしきかなや仰ぎみて

これぞ発心の門としきげは

発心門王子から水呑、伏拝、祓戸の王子をたどって、湯ノ峰王子へたどりつた。本宮への参拝後の入湯場であったが江戸時代から三山へお参りする前の湯垢離の場となった。ここから熊野三山の中心として厳肅なたたずまいをみせる熊野本宮大社に着いた。旧称を熊野坐神社と呼んだ。熊野に鎮座する神のやしろの意で、神名がない。その名の通り一番奥地にある本の宮で、おそらく草創は遠く神代のころであろう。

本宮より国道一六八号線を進み、請川東部にある古道入口の表示から

家々の間の狭い石段を登り、如法山の肩まで比高五〇〇メートルを登る。請川より那智大社までの三五キロの間には松畑茶屋跡、石堂茶屋跡、桜茶屋跡、椎ノ木茶屋跡、地藏茶屋跡登立茶屋跡と熊野詣の楽しみの茶屋跡があり、道のところどころに歌碑や句碑が建てられている。

熊野古道の中でも最大の難所といわれる大雲取、小雲取を越えなくてはならない。小雲取越えの道は赤木川畔小和瀬に下り小口川と東川の合流点小口に至る。ここから大雲取越えの登り口を入ると、小さい道標がある。尾根道には石畳の残っている所や休憩所が設けられ、小雲取り越えと同じく名倉峠までの道々には歌碑と句碑が建てられている。

途中の越前峠は標高八七〇メートルで、いったん谷まで下りて石倉峠の登りとなり、峠で那智勝浦町に入る。ここから地藏堂のある地藏茶屋跡まで下ると林道に合流し、やや単調な道を色川辻に至り、船見峠までは八丁坂の登りで峠の南側は胴切坂の下りとなる。あとは多少の起伏があるものの、大勢は下りとなり那智高原に達する。

那智高原の東部から青岸渡寺への道を下り、苔むした石畳と石段の道を行くと鐘撞堂の横に出る。

ここが、西国三十三ヶ所霊場一番札所那智山青岸渡寺である。

熊野三山のひとつ那智大社は、仁徳天皇五年に遷座したとあるから随分古いお宮で、本宮、新宮と同様熊野十二社権現（飛滝神社を加えれば十三権現）で、主祭神は熊野夫須美神であるので以前は那智夫須美神社と称していたといわれる。

那智の名は難地に由来したといわれ、古くから観音の浄土として信仰されて来た。大門坂まで来ると熊野九十九王子の最後の多福氣王子が見られる。大門口から県道にからむ旧道を進むと、市野々王子神社（市野々王子）を経て浜の宮の古刹、補陀洛山寺の隣に浜の宮王子の大神社がある。その前を通り宇久井までは国道に離れて旧道を通じ、宇久井の海岸近くで新宮市域にはいるとすぐ、佐野王子跡がある。海岸の一里塚跡を経て、三輪崎、広角の途切れた古道から王子ヶ浜の浜王子神社前を通り撰社阿須賀神社近くを進み、丹鶴城址の下を通り熊野速玉大社に着く。大社の参道に続く森の中の広い境内に、朱塗りの社殿が鮮やかである。

熊野三山のひとつ速玉神社の鎮座は景行天皇の御代と言われるが、それは一キロほど東にある阿須賀神社から移されて「新宮」と言った時のこ

とであるから、創建は恐らく神代にさかのぼるであろう。主神は速玉大神で、昔は熊野川沿いに境内一里四方もあつたという。

かくて、紀伊田辺より中辺路(熊野古道)を三日間かかった熊野三山への旅を終えて、心に去来するのは聖地への憧れを抱きながら現世極楽にいたる険しい山道を踏み登り、遙かなる熊野に向かった昔日の参拝者のことである。

信仰の道、熊野路は、今も比較的古道の面影をよく残す部分があり、線の豊かさとしし、水の清らかさだ。輝く南の海と深い山の交錯する、そして神と仏の交錯する不思議な国への旅のささやかな誘いである。

例によって、取材の先々で市町村の役所、社寺、教育委員会のかたがたには大変お世話になった。付記して深謝の意を表したい。

熊野古道(中辺路)の十丈越え、大雲取、小雲取越、大門坂の石畳や樹齢八〇〇年の夫婦杉など見所もたくさんあり、神聖で厳肅な景観に出会うことができるが、もし歩かれるなら単独行は絶対にやめ、経験豊かな道先案内人と同行することを強くおすすめする。

木之上城遺跡に 関する付記

松岡 正三

前号に掲載された拙稿の文末の付記について追加したい事柄があるの
で次の通り補足する。

まず第一項についてやや詳しく述べれば、金尾太郎光国は近江の出自の尼子に与し、山城・丹後を経て、山陰にきたと思っっている。

また、新たに以下の第四項、第六項を加える。

四、平成九年四月に入手した「笠木山高松寺誌」によると、龍華寺初代住持・桂巖周昌和尚は、初代城主・金尾遠江守延貞の三男として生まれたと言う。

また、芳井の重玄寺開基・千畝周竹和尚が、桂巖に重玄寺を付与すると言う置文により長祿二(一四五八)年からは重玄寺二世になったと言う。
なおまた、文明一〇(一四七八)年には、仏通寺二十五世となったと言う。

延徳元(一四八九)年二月二十日に桂巖は示寂する。時に八十二才であった。

五、木之上城の落城については、八

代金尾長門守信国が戦いに敗れて、庵を結び僧となつているので、没

年の天文一九(一五五〇)年六月一三日以前、ということになる。四川(志川)滝山城の落城については、かなりくわしい史料がある。木之上城と同じく尼子であったことから調べてみた。

吉田町立歴史民俗資料館で求めた小都勇二著「毛利元就伝」の年表には、「天文二二(一五五二)年七月 志川滝山城を攻陥、城主宮光奇 備中に逃走」とある。

元吉田高校教諭であった森本繁氏の「備後史夜話」にも、「元就が志川滝山の宮氏を攻めたのは、天文二二年七月二三日である。」と。

「福山市史」にも、天文二二(一五五二)年七月二三日とある。

ところが、四川滝山城、落城四百年顕彰追悼法要と戦没者慰霊式が、昭和二五(一九五〇)年四月二一日と二二日の両日盛大に勤められた西蓮寺の寺記には、次のような記録がある。

五世永正法師の頃に、「天文一八(一五四九)年八月落城す。嫡男剃髪し、永正と名乗り、天文一九(一五五〇)年より当寺を相続する。」とある。

また「広瀬村誌」には、「天文十九(一五五〇)年四川滝山城主宮越後守入道して、光音と号す。西蓮寺を再興す。第三世の住居とす。」という記事もある。しかし、寺記によると第三世は「誓念法師」で、應永三一(一四二四)年一月二八日寂となつている。

天文二〇(一五五二)年九月一日に大内義隆は深川の大寧寺で自刃しているので、今後の検討課題である。

六、「木之上遺跡を守る会」は、福山市金江町の田頭隆義氏のご推薦により、平成九年四月二五日付けで、「小さな親切」実行章団体表彰を贈られた。

(会報76号正誤表)

※十四頁 二〜三段

(城主名について)

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十は、

・一、二、三、四、五、六、七、八に

※十五頁 二段 二〇行

(一五五〇) ↓ (一九五〇)

四角い古墳と鏡の謎

平田 恵彦

古墳時代には、鏡は現代のような単なる化粧道具ではなく、宝物であり、同時に権威と権力の象徴であったことはよく知られています。定説（小林行雄説）では、各地の豪族がヤマト政権に参画した証としてヤマト王権が鏡（とくに三角縁神獸鏡）を配布したのだ、とされています。

実際、前期古墳から出土した三角縁神獸鏡の出土数は畿内の古墳が群を抜いており、続いて北部九州、吉備、尾張と続いています。定説には十分首肯できるものがあります。

一方、都出比呂志さん（阪大教授）が近年、古墳の形（と大きさ）がヤマト政権における序列を表しているという説を提出し、これも定説化されつつあります。その序列では、最上位が前方後円墳で、以下、前方後方墳、円墳、方墳となっています。

この秋、一泊旅行で訪れる神原神社古墳（あの加茂町にあります）は出土した遺物などから鳥根県最古の古墳とされています。その出土遺物で注目すべきは「景初三年（西暦三二九年）」銘の入った三角縁神獸鏡があることです。

この年号の入った鏡の出土は全国で二例しかなく（もう一つは大阪府の黄金塚古墳）、数多く出土している三角縁神獸鏡の中でも特別なものです。なぜならこの年は卑弥呼が魏に遣いを送った年とされており、この鏡が邪馬台国機内説の重要な論拠となっているからです。

ところで、この古墳の形は四角、すなわち方墳です。実は出雲では全国的には少数派の前方後方墳・方墳が非常に多く、これが大きな特色となっています。方墳は都出説では最下位にランクされる墳形です。しかし、機内はともかく、出雲ではこの原則が当てはまらないのではと、私は思っています。いいかえれば、方墳はヤマト王権から強制されたものではなく、出雲の個性の主張ではないかと考えているのです。それには、いくつかの理由があります。

第一に、安来市の造山一号古墳は一辺が約六〇mもあり、古墳時代前期の方墳としては日本最大です。前期方墳は機内にもありますが、最大のもので出雲にあるという事実は大きいのではないのでしょうか。

第二に、弥生時代に山陰地方や中国地方を中心にして四隅突出型墳丘墓が築かれていることです。この墳丘墓は基本が四角をしています。そ

の四隅が出っ張っているのですが、方墳はその伝統を受け継いだものではないのでしょうか。

第三に、出雲が弥生時代には強大な勢力があったことが次第に分かってきたことです。ここ十数年の発掘成果を見ると、ただ事ではありませぬ。荒神谷遺跡や加茂岩倉遺跡はその徴証です。以前は考古学的な出土遺物があまりなく、神話だけの世界だと思われていたのです。

畿内には弥生時代に大きな墳丘をもつ墓がありません。方形周溝墓といって、溝を掘って四角い墓域を区画するだけで、伝統的にあまり盛土をしないのです。畿内の古墳は、弥生時代に墳丘墓を築いた吉備（円筒埴輪の原形）特殊器台形土器の設置）や北部九州（鏡の副葬）の要素を取り込む形で成立しました。

同様に、前期古墳の前方部のバチ形に開く部分は四隅突出型墳丘墓の突出部にルートがあるといわれています。そうした出雲がヤマト王権の規制によつて前方後方墳や方墳しか造られなかった、とはどうしても思えないのです。そうではなく、自ら選んだのだと私は考えたいのです。

ヤマト王権から重要視された神原神社古墳の被葬者も伝統に則り方墳を選択したのではないのでしょうか。

出雲・石見夢紀行

秋の一泊旅行の

要項決定

恒例の一泊旅行のコースや費用が決定しましたのでお知らせします。

《実施要項》

〔日程・集合場所〕

十月十一日（土）～十二日（日）

午前六時四五分（雨天決行）

※朝食は済ませてご参加下さい。

〔集合場所〕

福山駅北口バス乗降場所

（福山キャッスルホテル前）

〔参加費〕

会員 二万八千円／一般 三万円

（保険料・入館料・宴会費等込）

〔募集人員〕

四五名限定

原則として補助席は使いません。

〔申込方法〕

事務局に電話でお申し込み下さい

これが仮申し込みになります。その

後、七月に振込用紙をお送りします

ので申込金として一万円を払い込んで下さい（残金は当日）。

これが本申し込みになります。

〔キャンセル〕申込金について、九月

末までは全額返金、一週間前まで半額返金、それ以後は返金なし。

〔受け付け開始〕

六月十七日（火）午前八時厳守！

★主な探訪場所

★神原神社古墳 (加茂町)

邪馬台国論争畿内説の論拠となつた、全国に二枚しかない「景初三年」銘の三角縁神獸鏡を出土した島根県最古の古墳。本物の堅穴式石室を実際に見学できる数少ない古墳。墳形は出雲に多い方墳。

★旧本陣記念館 (平田市)

江戸時代松江藩の本陣として使われた屋敷と庭を移築して公開。豪農・豪商であった木佐家屋敷の白壁と黒瓦が調和した外観は見事。また、屋敷内の枯山水の庭園は格調の高さを感じさせる。

※昼食は併設の食事処「桃園」。

★鰐淵寺 (平田市)

見事な紅葉を誇る天台宗の古刹で比叡山延暦寺の最初の末寺。出雲にありながら、毛利の尼子攻めの際、鰐淵寺和田坊栄芸は終始一貫して毛利方に味方。輝元はそれに報いるため根本堂(本堂)を寄進。

★古曾志古墳公園 (松江)

古曾志大谷古墳(前方後方墳)を中心とした古墳公園。全国的には数の少ない方墳を中心とした古墳群がある。非常に整備されており丘から見える穴道湖が美しい。

★出雲大社 (大社町)

やはりここに行かなければ!

★石見銀山資料館 (大田市)

旧大森代官所跡にある。旧迹摩郡役所の建物を利用。鉱山資料、奉行人代官資料、町方資料を展示。石見銀山の歴史を追体験できる。

★山吹城 (大田市)

これぞ山城!非常に整備されており、山城の遺構をはっきりと見ることが出来る。戦国期には、大内・尼子・毛利が銀山をめぐる争奪戦を繰り広げた。山頂からの眺めは絶景の一言。登山時間はゆっくり登って約四〇分。

※原則として全員登山しますが、どうしても足腰に自信がない方には大森町の町並散策と史跡探訪をしていただきます。

★龍源寺間歩 (大田市)

銀山の坑道を間歩(まぶ)といい龍源寺間歩が唯一内部が開通されている。坑道の長さは二七三m、一方通行の通り抜けになっている。

★その他

一畑薬師、小早川正平の墓、日御碕神社、城山神社、五百羅漢、下河原吹屋跡、大久保長安の墓、順南原一号古墳など。ただし、時間がない場合は省略。
★宿泊は夕陽のとても美しい「眺瀾荘」(日御碕海岸)です。島根県簸川郡大社町日御碕五九八

☎〇八五三(五四)五一一

湯舟城探訪記

遵行使節 沙弥

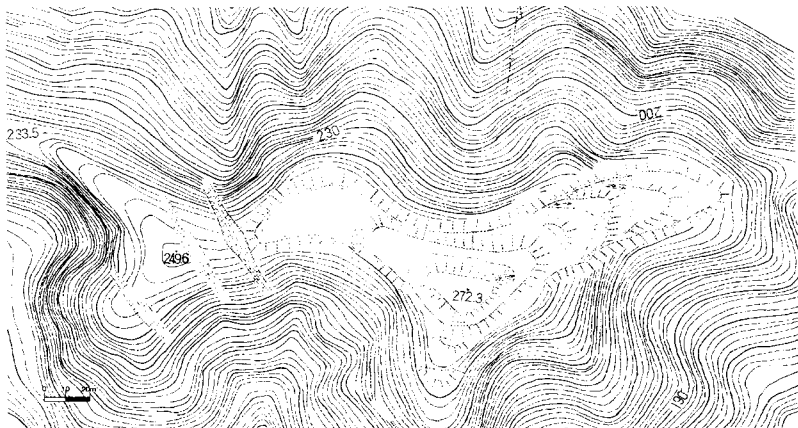
ぼ・ぼ・ぼくらは備陽史探偵団、

ぼ・ぼ・ぼくらは、備陽史探偵団と勢い込んで集まった、中世城郭大好き人間、十一名。田口会長、出内城郭部会長、佐藤錦士さん、小林浩二さん、黒木さん、藤田さん、矢野さん、高畑さん、坂本さん、紅一点は物好きの宮宗さん、最後が私、沙弥。目指すは「広島県中世城館総合調査報告書」にも載っていない芦田町の湯舟城。

集合地点の福山動物園前をA地点とすると、中世の頃大和氏が立て籠ったという湯舟城はB地点。A地点とB地点は、車でわずかに約二十分。いざんで駆け出し到着した。

ぼ・ぼ・僕らの前に立ちほだかつたものは、なんと道があい。どうやって登れというんじやい、とぼやく沙弥。そんな事にお構いなく、元気な出内部会長、藪を掻き分け登り出す。続いて測量道具を抱えて、藪をコギコギ登り出す探偵団の面々。登ること二十分。着いた着いた意外に早く、二の丸郭。なんだ矢

笠城に比べたら全然ラクチン。これから田口会長の指揮のもと、全員で測量開始。その成果が左の湯舟城略測図です。初めて沙弥が書いた図面なので少々の間違ひはご容赦ください。



湯舟城略測図

事務局日誌

○四月十三日(日)

バス例会「元就の居城 吉田郡山城跡を訪ねて」講師田口会長、参加九十八名。

大型バス二台満席という。当会始まって以来の参加者を記録。好天に恵まれたこともあって、講師の田口会長は汗だくでかくであった。

○四月十九日(土)

「備後古城記」を読む。参加十二名。終了後、「山城志」第十四集の発送作業

○四月二十六日(土)

第四回郷土史講座「吉備南部の終末期古墳」講師網本善光、参加二十六名。

○四月二十七日(日)

賀茂町石造物調査(歴史民俗研究部会) 参加十五名

○五月五日(子供の日)

第十五回「親と子の古墳巡り」古墳研究部会の案内で駅屋町の服部大池周辺の古墳を巡る。参加七〇名

○五月十日(土)

「古事記」を読む会 参加廿一名

○五月十一日(日)

賀茂町石造物調査(歴史民俗研究部会) 参加十三名。午後調査を

打ち切り、新市相方城跡の現地説明会へ。

○五月十七日(土)

「備後古城記」を読む。参加十五名。

○五月十七、十八日(土、日)

田口会長・平田・中村氏、一泊旅行の下見へ。赤名峠を越えて出雲の国へ。当日は日御崎へ宿る。二日目大社へ参拝の後、石見銀山へ詳細は別記を参照(乞う御期待)

○五月三十一日(土)

第五回郷土史講座「備南の磐座」講師平田恵彦 参加四十名

○六月一日(日)

徒歩(〇)バス例会「広島北部の史跡を訪ねて」講師平田恵彦 参加四十六名

連日の平田節に参加者ウツトリ? 好天にも恵まれ、さわやかな例会であった。

今後の行事予定

【古墳講座】

日時 七月五日(土)

午後二時より

場所 中央公民館

会費 百円程度

【古事記を読む会】

日時 七月十九日(土)

★日程変更 午後二時より

場所 中央公民館

会費 百円程度

【備後古城記を読む会】

日時 七月十九日(土)

午後七時より

場所 市民会館 ★会場変更

会費 百円程度

新入会員紹介

四ヶ月ぶりに会報の編集を担当しました。最近、パソコンにご無沙汰だったので疲れました。原稿をお寄せ下さった皆さんに感謝致します。最近、石母田正さんの書かれた『中世の世界の形成』と言う本を読んでいます。東大寺の荘園であった伊賀国黒田庄の歴史を描いた名著です。石母田さんという方は、非常に頭の良い人だと感心しながら読み進めています。荘園の歴史など殆ど素人の僕にも理解が出来る筆跡で中世荘園の歴史が語られています。

遵行使節 沙弥

編集後記

CONFIDENTIAL
備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため掲載できません。

備陽史探訪の会事務局 ☎七二〇

福山市多治米町五十一十九一八

☎〇八四九(五三)六一五七